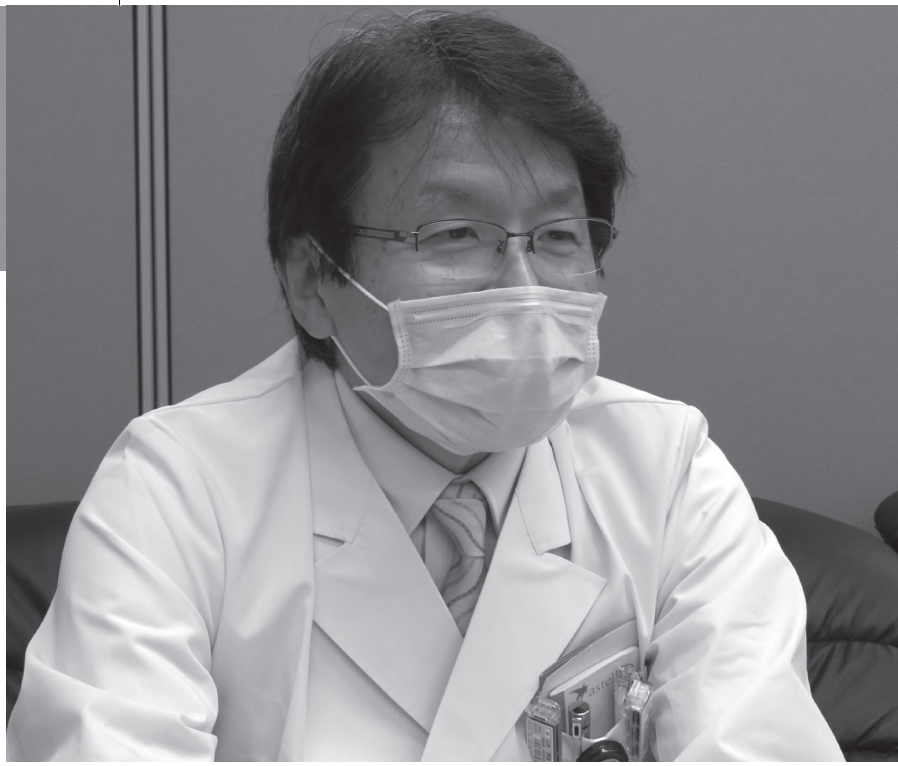
INTERVIEW

自治医科大学内科学講座
消化器内科学部門 教授
山本博徳先生



若い頃に経験したさまざまな“点”が，今の自分につながっている!

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

消化器外科から消化器内科に方向転換

山田隆司(聞き手)　今日は，自治医科大学に山本博徳先生をお訪ねしました．先生は自治医大の卒業生で，現在，消化器内科教授として活躍していらっしゃいます．またダブルバルーン内視鏡やヒアルロン酸ナトリウムを用いたESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)の開発者としても有名です．

はじめに先生が卒業してからここに至るまでの経歴をご紹介ください．

山本博徳　私は自治医大の高知県７期で，1984年の卒業です．卒業してすぐ高知県に戻り，高知県立中央病院で初期研修をしました．そこは消化器が強く，消化器内科，消化器外科ともに非常にアクティブにされていたので消化器関係に興味を持ちました．最初は消化器外科をやりたいと思っていました．当時腹部エコーなどで診断をして，どういうふうになっているかを想像し，実際に手術をして正解が見える．だから診断のできる外科医になれば診断から治療まで，自分で満足してできるのではないかと思ったのですね．それで初期研修の２年目はほとんど外科をやっていました．

３年目で地域中核病院に出ることになり，幡多郡大月町の大月町国民健康保険診療所へ行きました．そのときもまだ外科を目指そうと考えていたので，週１回の研修は県立宿毛病院に手

術を学びに行っていました.

山田　大月診療所には複数の医師がいたのですか.

山本　はい，１期生の夕部富三先生が，１ヵ所の診療所の機能，レベルでは地域医療の質を上げるのは不十分だということで，大月町に複数あった診療所を統合して19床の有床診療所を作って頑張られていて，そこに私も行きました．初代所長は高知県立中央病院の副院長をされていた塩見文俊先生が就かれ，夕部先生が２代目所長でしたが，そのほかに５期生の小野歩先生，１年上の高橋亨先生がいらっしゃいました.

山田　その診療所は大月町以外の地域の診療もしていたのですか.

山本　はい．診療所のある地区だけでなく，大月町内の他の地区にも出張診療をしたり，患者さん用の送迎バスを出したりもしていました.

山田　卒業生がまとまって面倒をみていた地域なのですね.

山本　そうです.

山田　有床診療所で入院患者もいたのですか.

山本　入院患者もいました.

山田　カバーしていた地域の人口はどのくらいだったのですか.

山本　その当時，８千人くらいだったと思います.

１年間，大月診療所にいて，４年目に沖の島へき地診療所へ行きました．沖の島は人口400人の離島で一人診療所でした．そこにいた時も週に１回は県立宿毛病院で手術をしていました.

そこに１年いて，５年目に高知県と愛媛県の間にある山間へき地の吾川村の大崎診療所に行きました．有床の一人診療所で，実はそれまで何年間も診療所が閉鎖されていたのです．ところが当時の吾川村の村長さんが，診療所に医者を連れてくるということを公約にして，自治医大の卒業生を誰か派遣してほしいと県に話がいったのですね．卒業生の話し合いの中で誰か行きたい人はいますか？と言われたときに，私が率先して手を挙げました．なぜ率先したかというと，先輩たちが優秀だったので優秀な先輩と比較されるより，そのほうが有利ではないかと(笑)．うまくいかなくなって閉鎖していたところだったので，医者が行くだけで…….

山田　ものすごく喜んでもらえる.

山本　そうなんですよ(笑).

山田　実際に喜んでもらえましたか.

山本　喜んでもらえました．でも立地としては目立たないところにあったし，患者さんたちはすでにほかの医療機関にかかっていたので，すぐには戻らなかったのですね．対策を立てないとこのままではいけないと思い，健康教室を開いたり，巡回で送迎車を出したりという計画を立てて実践したところ，１年で黒字に戻り２年目には健康センターを併設しようという前向きな話になりました.

その頃に，診療所にいると手術というのは難しいなと思ったのですね．初期研修の時に一緒に研修していた外科の人たちはどんどん症例を経験していくし．それで内視鏡はできるので消化器内科のほうがいいかなと考えました.

山田　診療所でも内視鏡はやっていたのですか.

山本　やっていました.それで吾川村の診療所に行ったときから，週１回の研修を高知医科大学の第一内科に変えて，消化器内科に方向を転換しました.